東方屍生記

春夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方屍生記

【Ｎコード】
Ｎ９０００Ｙ

【作者名】
春夏

【あらすじ】
超バカな高校生が突然ダンプカーに撥ねられ死亡した。
だが、見知らぬ女性…星伽夜歌の手によって、ゾンビとして蘇った主人公。
そして、星伽夜歌は自分の物語の構成の為に、ゾンビになった主人公を幻想郷に送りつける。
主人公…和永明人が幻想郷で死にまくる物語。

1頁【始まり】

突然ですが、俺は一度死にました。

なぜ死んだかは、後ほど説明します。
そして俺は、幻想郷という世界で第二の人生を送っています。
第二の人生…どこぞの転生物語を生で実感するなんて思ってもみなかった。

…ってか、何だ？
この始まり方は。
まぁいいや。

今は博麗神社っていう神社で世話になっています。

え？　どんな場所かって…？
一言で言うと、全く参拝客が来ない事で有名な神社です。
今、その神社の巫女さんに買い物を頼まれての、帰りです。

人使いが荒いというか、胸が無いというか…見た目は可愛いんだけど、遣る事が全部メチャクチャな巫女さんの元で、生活をしています。
どれくらいメチャクチャかと言うと、この数日であばら三本、大腿骨一本、上腕骨二本が巫女さんの手により、逝きました。
その巫女さんの入浴シーンを見た日には、首の骨が綺麗に折られました。

え？　なぜ生きてるかって？
それは…

「キャァァアアアア！！」

おっと、女性の悲鳴だ。
説明を後にし、俺は悲鳴のあった場所に駆ける。
駆けている途中、何度か人里で買った、買い物袋の中の野菜を落としそうになる。
一つでも落としたら、大惨事だ。
大変な意味で。

予想的中。
女性が妖怪に襲われている。
涎をダラダラ垂らした、厭らしい熊みたいな妖怪だ。
妖怪と聞いて、疑問に持つ人が居るかもしれませんが、幻想郷という世界は妖怪や魔法使いなんかもいる幻想的な世界です。

まぁ、そんな事は置いといて。

その厭らしい妖怪が、鋭く長い爪の生えた手を振り上げ、女性に振り下ろそうとしている。
んな事、俺の目に前でさせると思ってんのかよ！！

グチャリ

女性の代わりに、俺がその鋭い爪に貫かれた。
四本の長い爪が、完全に俺の身体を貫く。
まぁ、普通ならこのまま天に召されるんだろうけど、生憎、天国の

天使ちゃんにも、地獄の鬼さんにも嫌われちゃったんで、お迎えに来てくれないんだよな。

…つうか、超イテェェエエエ！！！

説明できないくらいの痛さだよチキショウ！

女性が怯えた目で俺を見ている。

当然か。

自分を助けてくれた人が、目の前で妖怪の長く鋭い爪の餌食になっているんだ。

今にも失神してしまいそうだな。

あれ…何か忘れているような…。

あ！　人里で買った野菜が、俺の血で全部赤く染まっちまってるよ！

しかも、野菜がいくつか地面に落ちて、トマトやキュウリが潰れている！

…あ～あ、今日は俺の骨格が折れたキュウリのようになり、頭はトマトのように潰されるんだろうな。

不幸だ。

俺にこんな不幸を齎した熊のような妖怪には…帰った後の俺の状態にさせてやる！

カッコイイ台詞（全く格好よくないが）を心の中で叫ぶと同時に、妖怪が爪から俺を引き離し、地面に叩きつけ、女性を狙う。

俺には全く興味無しですか。

こんなに痛い目にあったってのに。

許せねぇ！
…まぁいいや、これで自由に動けるし。

「おい、変態熊妖怪！　俺はまだ生きてるぞ！！」

背中を向けて女性の方に歩き出した妖怪が、俺の方に振り向く。
俺が生きていた事に驚いたのか、妖怪が目を見開いて、バカのような顔になっている。

いつ見ても堪らないな。
俺を死んだと思ったバカが、生きて復活した俺を見て驚く様は。

その時、なぜか女性が俺の姿を見て、完全に失神した。

…え、どういう事？
俺の今の姿は女性から見たら、妖怪以上におぞましい姿なの？

…涙が出てきたよ。

まぁいい…。
聞いて驚け妖怪。
俺は…

「俺はゾンビだぜ！！」

一世一代のカミングアウトをしてやった。

…あれ、そういえば…俺まだ名乗ってねぇ！！

1頁【始まり】（後書き）

この度、オリ主の幻想入りを書かせて頂きました。
1話って事で、色々説明不足ですが、後々説明していきます。
因みに主人公はある小説の主人公に似ています。

2頁【幻想入り前】（前書き）

駄文極まりないですが、暇な方はどうぞ。

2頁【幻想入り前】

あれは、学校から自宅への帰宅途中だった。

俺はいつも通りの帰り道を、一人で寂しく帰っていた。
なぜ一人かと言うと、期末テストで名誉ある学年最下位を頂き、賞
として先生とマンツーマンで勉強をさせて頂いていたからだ。
お陰で友達はみんな先に帰宅し、一人で帰るはめになった。

夏が近づいていたせいか、太陽がいつもより元気に活動している。
マンホールの上で卵を割ったら、目玉焼きが出来そうな程の暑さだ。

そんな中を、俺は自宅まで帰宅している。
人の通行はあまり無いが、車道を走る車は少し多い。
だから俺の横を車が横切った時に出来る風が、とても心地よかった。

その時だった。

俺の歩く歩道と、車が通行する車道の向かい側の歩道に、超美人の
女性が俺に背を向け、歩いていた。
しかも、この気温だ。
かなり露出度の高い服を着ている。
どう露出度が高いのかは、皆様の御想像にお任せいたします。

そして俺は、その後ろ姿を齧り付くような、変態の眼差しで見ています。
きっと、俺の今の目を見たら、女性は「キモォ〜」と、言うでしょう。
その証拠に「何アレ、気持ち悪いよ」「きっと性犯罪者よ」という女性達の会話が俺の耳に入った。
予想していたより、酷い言葉が来るなんて思ってもみなかったよ。
心が少し、傷ついた。

だが、仕方が無い事だ。
健全な男子校生なら、見惚れてしまう程の美人なんだ。
まぁ、後ろ姿しか分かんねぇけど。

…気付いた時には遅かった。
妄想という物は恐ろしい。
俺が後ろ姿の美人さんを眺めながら、色々妄想をしていると、いつの間にか車道に出ていた。
そう、足が勝手に美人さんの方に向かっていたのだ。

本当にバカですよね。

勿論、無事で済む訳がありません。
そこを通行したのが、単車や軽トラなら助かったかもしれなかったんだが…運が悪い。

何と、俺の目に入ったのがダンプカーだった。
そこから先の、俺の未来は皆様でも分かるでしょう。

綺麗撥ねられ、痛みを感じずに即死でした。

▼▼▼▼▼▼▼

それから俺は、天国に行けると思ったんですが、何故か真っ白い何も無い空間に居ます。

「…何処だ、此処？」

上も下も、右も左も、前も後ろも、全てが白。
何も無い。
ただ、この状況に意外に冷静な俺がいるだけ。

…天国では無さそうだ。
だって天使のお迎えが来ないし。
しかも、服装はダンプに撥ねられる前の学校の制服。
もし此処が天国だって言うんなら、俺は天国に革命を起こします。

…だったら、地獄か…。
いや、無いな。
俺はそれ程、生きている間に悪さなどはしていない。
…多分。

「ここは地獄では無いわよ」

突然、俺の背後から女性の声が聞こえてきた。
俺は振り向く。
さっきまで誰も居なかった筈なのに、其処には超絶美人の女性が居た。

キラキラ光っている様な長い浅紫の髪。
透き通る菫色の瞳。
服装は…巫女装束だが、緋袴ではなく紫袴だ。
巫女装束の上からは、透け透けの紫色の着物を羽織っている。
紫を基調とした服装だな。

…いやはや、鼻血が出そうなほどの美人だ。
つうか、急に声を掛けられたせいで忘れ掛けたけど…俺の心を読んだ？

「あんたは何者だ？」

聞きたい事は色々とあるが、まずはそれから聞く。

「私は星伽夜歌（ホシトギヤカ）。君を蘇生した女だ」

…ん～、どうリアクションするべきか？
悩むな。
こういう時って、過剰に反応したり、頭が回らなかったりするのだろうけど、生憎と俺はそんな素直な反応が出来ない。
「ふ～ん」程度しか反応できないのだ。

「おいおい、リアクションなんかで悩むなよ」
「ん？　やっぱそう思う。じゃあ、リアクションは面倒だから取らないな」
…あれ？
今も、俺の心の中を読んだ？
「読んだ。と、答えておこうか」
やっぱり。
「本当に何者だよ、あんた？」
普通の人間…では、無い事は確かだ。
「あんたじゃなくて、星伽夜歌だ。二度目は言わせるなよ」
「分かったから、俺の質問に答えてくれないか？」
「…物語を創りし者だ」
「物語？」
物語を創りし者？
聞いたこと無いな。
本とか書く人の事かな？
「ああ、率直に言おう。君には私の為に、ある世界に行ってもらいたい」

…違ったみたいだな。
この展開はアレだ。
前に読んだ、主人公が突然死んで、神様に生き返らして貰うって話。
確か異世界転生って奴が結構有名だったっけ？
まぁいいや。

「…うん、別に良いですけど」

少し興味が有ったから、引き受けてみた。
ってか、この状況でも冷静な自分が怖くなってきた。

「あっさりだな。君のような人間は初めてだ」

「ん～、まぁ、自分でも自分の事をよく分かってないから、答えられないや」

「そうか。では、引き受けてくれた君には褒美として、好きな能力を上げよう」

でたよ、こういう展開。
絶対にこうなると思っていた。

「何でも良いのか？」

「ああ。何せ私には？能力を作り出す程度の能力？があるからな」

程度？
どこが程度なんだ？
そんなチートな能力が。

「作り出すか。死んだ俺を蘇生したのも、あんたの能力って訳か？」
「その通りだ。？生物を完全蘇生させる程度の能力？。私の２２５番目の能力だ」
いくつ能力持ってんだよ！
自分で能力を作って、自分の物にしてるのか！？
なんちゅう馬鹿げた奴だ！
「因みに君の心を読んでいるのは、？心を読む程度の能力？。私の３８５番目の能力だ」
この出鱈目の数の能力の方が、リアクション取り易いな。
「…欲しい能力か…」
何でも欲しい能力ね～。
「あまりチート過ぎるのは止めてくれよ。物語の作成として、面白みに欠けるからな。それと最高でも三つまでにしてくれ」
「そっか。なら、俺を不老不死にしてくれ」
何となく、そんな事を口走ってしまった。
どうしてだろう？
「不老不死…それなら心配するな。君は既に不老不死という名の？ゾンビ？だ」

…は？
どういう事？
「君を生き返らす時に、普通に蘇生させたんじゃ詰まらないから、ゾンビという名の、おまけ付きで蘇らせた」
他人事のようにと言うか、人のことを弄んでいやがると言うか。
訳分からん。
…ゾンビか。
そういえば、ライトノベルにゾンビが主人公の奴があったな。
ちょうど、良いや。
「だったら、俺を…」
「言わなくても良い。心を読んで分かった。あるラノベの主人公のようにして欲しいのだな」
「あ、ああ。出来るか？」
「容易い」
星伽さんがそう言うと、手を俺の方に翳す。
すると、星伽さんの手が光りだした。
「な、何だ？」
流石の俺も驚く。
そして、徐々に光りが消え始めた。

「今、君に相川歩という主人公と同じ力を上げたのさ。おまけに、魔装少女にもなれるようにしてやった。魔装錬器無しでだ。嬉しいか？」

ま、魔装少女だと…！？
あんな、変態女装野郎になっちまうのか…！

魔装少女が分からない人への簡単な説明。
魔法少女の様な衣装姿に変身し、強くなる。
それだけだ。
ただ、男が変身すると、見事なまでに醜く、気持ち悪い姿になる。

「余計な事してんじゃねぇ！」

「で、他には何か無いのか？」

俺のセリフが完全にスルーされた。
まぁ、別に良いか。
女装する代わりに強くなれるんだし。

「ん～と、じゃあ、色んな武器を出せるって奴はどうかな？」

「色んな武器？　？武器を発現する程度の能力？ってとこか？」

「うん。そんな感じの奴で」

何か、適当な感じになってきたな。

そして俺は、星伽さんから二つ目の能力を貰う。

「それじゃあ、最後に何か欲しい能力とか有るか？」
ん～…正直無いな。
これと言って。
「そうか、分かった。では、勝手に私が決めておく。じゃあ、そろそろ君には幻想郷という世界に行ってもらおうか」
お好きに何でもどうぞ。
ってか、もう口に出して話さなくてもよくなったな。
「ああ」
すると、いきなり俺の意識が曖昧になってきた。
眠い。
そんな感覚。
「次に君が目を覚ます時は、幻想郷という幻想的な世界だ。君はそこで第二の人生を送る。良いな？」
目が霞んでくる中、星伽さんが話しかけてくる。
「それと、君を蘇生させた時、ちょっと？厄介な者？が一緒に蘇ってしまったから気を付けろよ。そいつは先に幻想郷に送りつけたが」
「は？　何だよ、それ！？」
俺は朦朧とする意識の中、星伽さんに聞く。

「確か、？和永暗人（カズナガアント）？と名乗っていたな。まぁ、心配するな。君の心の闇のような物だ」

気にするよ！？

何だよ、もっと早く言えよ！

「それと最後に一つ。まだ、君の名を聞いていなかったな。何と言うんだ？」

最後に聞くことじゃ無いよなそれ。

俺は倒れる寸前に答える。

「和永明人（カズナガアキト）」

俺の意識は、ここで途絶えた。

キャラ頁【オリキャラ紹介】

和永（カズナガ）　明人（アキト）
性別：男
年齢：１６歳
職業：高校生
身長：１７２ｃｍ
性格：優男で、歳相応に妄想したりする。超バカ。
外見：髪の色は薄茶色で、少し死んだ目をしている。
能力：武器を発現する程度の能力。
特異体質：不死であり、身体が破損しようと再生できる。魔法少女のような変身をする。

ある日、美人さんに目が暮れ、美人さんの方を見ていたら車道に出てしまい、気付けばダンプカーに撥ねられ死んでしまった超バカな高校生。
そんな彼は、天国で第二の人生を過ごすと思いきや、第二の人生を幻想郷で過ごす事となった。
高校生、和永明人の第二の人生が此処で始まる。

星伽（ホシトギ）　夜歌（ヤカ）
性別：女
性格：胡散臭い風貌で、何を考えているか分からない。
外見：紫の長髪で、巫女のような服装をしている。
能力：能力を作り出す程度の能力。心を読む程度の能力。生物を完全蘇生させる程度の能力。などなど。

詳しい詳細は不明。
バカな死に方をした主人公を助けてくれた女。
目的は物語の作成。
能力を複数所持しており、主人公を死から生きかえらし、幻想郷に移転させた張本人。

和永（カズナガ）　暗人（アント）
身長：１７２ｃｍ
性格：主人公とは正反対で非道・好戦的。主人公と違ってバカでも変態でもない。
外見：髪の色は白色で、狂気の眼光を常に湛えている。
能力：武器を発現する程度の能力
特異体質：不死であり、身体が破損しようが再生できる。

夜歌の能力で主人公が復活すると共に、新たに生まれた人間。
主人公より先に幻想郷に行き、行方は不明。

3頁【主人公の力】

そんなこんなで、俺が死んだ理由の話は終わり、本編に戻る。

俺は熊妖怪（勝手に命名）と対峙する。
大きさは俺の二倍くらい。
手には鋭く尖った爪。
獲物を一撃で食い殺せる鋭く尖った牙。

普通に考えたら俺の負ける方に人々は挙手するだろうが、生憎と俺は普通の人間ではない。
まぁ、前回の話で皆さんは知っているだろうけど。

俺は拳を握り構える。

「グォォオオオオオ！！！」

急に熊妖怪が吠え出し、それと共に大地を蹴り、高速で距離を詰めてきた。
巨体に似合わぬ速さだ。
そして大きく右腕を振り上げ、一気に俺へと振り下ろしてくる。

「甘めぇ！」

俺は軽く後ろに跳び、簡単に避ける。
この程度なら避けるのは容易い。
だが…。

「ヴッフェエ！！」

急に右頬に凄い衝撃。
まるで鉄球が勢いよく顔面に当たった感じだ。
よく見ると、熊妖怪が俺の頬に蹴りを入れて来ていた。
短い足してる分際で…どうやって…？

熊妖怪はその俺の怯んでいる隙を突き、両手の鋭い爪で俺の腹を刺して来る。
一回刺しただけで、血の量が半端じゃない。
普通の人間だったら一発で逝けるな。

そして熊妖怪はそれを、刺しては抜き、刺しては抜きを何回も続ける。
どんだけ俺を刺したいんだ？

今からこれを回避するのは…無理だな。

「クッマァアアアッ！！」

熊妖怪はクッマーと馬鹿げた声を上げ、ボクサーの何十倍ものアッパーカットを俺の顎に決めてきた。
完全に顎の全てが逝った。
あっけなく上空に吹っ飛ばされた俺は、空中から頭で地面に着地し、血溜りを作り上げる。

「くそ…ごっつ痛いわ」

ゾンビなのに痛みは感じる俺。
けど気絶もしなければ、痛みで精神がおかしくなる事も無い。
これって少しと言うより、最悪なくらい辛いな。

身体は爪の刺突攻撃により穴だらけ。
顎はアッパーで完全に逝った。

けど、俺はゾンビだ。
こんなもの一瞬で再生できてしまう。
本当…そこだけは便利だな。

死ぬ事の出来ない不老不死の身体。

それが俺の唯一の個性だ！

俺はゆっくりと立ち上がり、再び熊妖怪と対峙する。
流石の熊妖怪はもう俺が生きている事には、驚かない。
…つまんねぇな。

熊妖怪はギラリと歯牙を輝かせる。
どうやら次は俺を喰らうようだ。

「ったく、じゃあ、そろそろ俺の力も見せてやろうか」

俺は拳を強く握り締め、目を細め構える。
その瞬間、熊妖怪は俺に向かって駆け出してきた。
陸上選手も驚きのダッシュ力だ。

そのダッシュ力を活かして、俺に向かってタックルをしてくるようだ。
完全にフットボール選手の爆走アッタクの何十倍もの威力だろうな。

けど、俺はそのタックルをして来た熊妖怪を、片手で受け止める。

それに熊妖怪は驚く。
何たって自分のタックルを、俺に片手で止められたんだからな。

「さてと、さっきのお返しだぜ。熊野郎！」

俺は空いている右拳を、熊妖怪の眉間に思いっ切りヒットさせる。
それにより、熊妖怪は白目を向き、ドスンと音を立てて倒れ伏した。

人間は力を１００％使えないって言う話を聞いた事がないだろうか？
１００％の力を出してしまうと体が耐えられなくなるので、脳が勝手に力をセーブするんだと。
ほんとの危機にが迫った時に、たまにその力を使う事があるらしい。
火事場のなんとかだ。

で、俺だが、体が耐えられたりする。
勝手に力をセーブして欲しいくらいだ。
１００％どころか何百と出せるぜ。

だって俺…ゾンビだから。

力を出しすぎて反動で腕とかが潰れても、即再生。
ただし、痛みは感じるのでここだけは注意だ。
熊妖怪を一撃でノックダウンさせた時は、その力を２００％くらい出して打ち込んだ。
だから俺でも倒せた。

しかし俺の腕はグッチャグチャのダランダラン。

ボトッ…

あ、腕が落ちた。
まぁ再生するから良いけど。

「…んじゃ、女性を人里まで運ぶか」

俺は気絶している女性を見る。
流石にこのままにしていたら、また妖怪に襲われてしまう。

ってか、格好の獲物になる。

「…マジかよ」

俺が女性に近づき、担ぎ上げようとした瞬間、背後から凄まじい殺気と共に複数の気配を感じた。
そして振り向くと、何とさっきの熊妖怪と全く同じ妖怪が六体いた。
何ともおぞましい光景だ。

「おいおい冗談じゃねぇぞ。俺に何か恨みでもあんのかよ」

と、倒れている熊妖怪を一瞥する。
そっか、恨みを買うような事をしたのは俺か。

と、なると、こいつらはこいつの仲間の種族って訳か。
ったく、やってらんねぇなオイ。

「グルルルルルル」

熊妖怪共が今にも襲ってきそうな勢いだ。
戦いは避けられないな。

仕方無ぇ。
数が数だし…本気で行くか。
…あまり気乗りしないが。

俺は目を瞑り、意を決して、ある呪文を唱える事にした。
この呪文を思い出すのに一夜かかった。
けど、思い出したら簡単だったな。

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ！」

俺は呪文を唱えた。
すると、どうだろう。
俺の服が弾けるように破け、光りが集まってきた。
この時点で恥ずかしさは頂点を極めている。

そして光りが一つに集まり、俺の体をなんの生地で出来ているのか疑問の残るコスプレ衣装がコーディネートされる。
パッと見は完全に魔法少女を連想させる衣装だ。
ピンクを基調とした衣装で、勿論ミニスカートに白色のニーソ。
頭には可愛らしい大きいリボンが二つ付いたキャップ。
首元には黒いリボン。

これを女の子が着たら可愛いが、今着ているのは男の俺。
しかもスカートが短いので、中が見えかけ。
変身して下着も変わっての縞パンだ。
…やばい、恥ずかしくて逃げ出したい。

だから嫌なんだよな…変身するの。
完全に女装趣味の変態だ。

けど、これで俺はさっきの何十倍も強くなれた。
それだけじゃあ、無い。

俺には？武器を発現する程度の能力？がある。

簡単に説明すると、俺は出したい武器を瞬時に出す事が出来る。
しかも、俺の場合は外の世界で読んできた漫画やゲームの様々な武器を出現させる事も出来る。
勿論、その武器に能力があれば、その能力も使用可。

よく考えればチート能力かもな。

「じゃあ、お前らは…この武器だ」

俺はある武器を想像し、手元に出現させる。
それはチェーンソー。
何とも魔法少女の格好には似つかわしく無い武器だ。

これはチェーンソー型の魔装錬器（ミストルティン）。
因みに魔装錬器（ミストルティン）とは、魔装少女が使う武器だ。
魔力が無いと使えないんだったっけ？

まぁ、俺にとっての魔力や霊力や妖力などの力は全て、体力で養う事が出来る。
ここも一つの便利ポイントだな。

「行くぜぇ…魔装錬器（ミストルティン）魔力全開！」

瞬間、俺からピンク色の光りが発せられ、チェーンソーが動き出す。

「ウォォオオオオラァッ！！！」

そして、俺は熊妖怪共に向かって跳んだ。
それにより俺のスカートの中の縞パンも全開される。
けど相手は妖怪。
きっと気にしないはずだ。

…さて、一丁派手に暴れるか！

……
……
……
……
…

「ふぅ～終わった終わった」

俺は一仕事を終えた職人のように、額の汗を腕で拭った。
それをし終わると、コスプレ衣装を解除して、さっきの服装に戻る。
魔装錬器も、それにより消える。

「急所は突いてねぇから、安心しろ」

俺は気絶している熊妖怪共を見ながら言う。

こいつらに悪気は無いと思ったから、気絶程度で済ませた。
それに妖怪でも殺すってのは好きじゃねぇし。

まぁ、俺は帰ったら一回殺されるんだろうけど。

と、ちょうど良いタイミングで女性が目を覚ましてくれた。

「ん…ん～」

目を擦りながら上半身を起こす女性。
まるで朝の眠りから覚めたような感じの清々しさを感じる。

ったく、暢気なもんだな。
さっきまで妖怪で気絶…

じゃなかった…俺を見て気絶したんだっけ。

悲しくなってくるな。
思い出すと。

「立てますか？」

でもまぁ、そんな事はどうでも良い。
人一人の命を救ったと思うと、そんな事どうでもよくなる。

俺は女性に手を差し出す。
女性は俺を見上げて…

何か嫌な物を思い出したのか、女性の顔が青ざめていく。
どこか体が悪いのか…？

「きゃぁぁぁあああああ！！！　化物ぉぉおおおおお！！！」

ゾンビの鼓膜を潰さんばかりの悲鳴。
どうやら俺のあの時の姿を思い出して叫んだようだ。

そして女性は思いっきり俺に向かって、ビンタを繰り出してきた。
諸にそれを顔面に受けてしまった俺は…顔に痛みより、心に痛みを負ってしまった。

何で…こうなるの？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9000y/

東方屍生記

2011年12月23日23時48分発行